

氏 名 (本 籍)	野 <sup>の</sup> 田 <sup>だ</sup> 尚 <sup>ひさ</sup> 史 <sup>し</sup> (石 川 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,478 号		
学位授与年月日	平成11年 2 月28日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
学 位 論 文 題 目	文の構造と機能からみた日本語の主題		
主 査	筑波大学教授	博士 (文学)	湯 澤 質 幸
副 査	筑波大学教授	Ph. D.	草 薙 裕
副 査	筑波大学教授		高 田 誠
副 査	筑波大学助教授		坪 井 美 樹
副 査	筑波大学助教授		矢 澤 真 人

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、「～は」で表される日本語の主題とそれに関連する諸問題を、文の構造と機能の両面から明らかにしようとするものである。

日本語の主題については、さまざまな視点から多くの研究が行われてきた。しかし、これまでの研究は、部分的な研究が大半であった。本論文は、日本語の主題に関する総合的な研究を目指して、主題を持つ文だけでなく、主題を持たない文も分析の対象とし、また、単文だけでなく複文での主題の現れ方についても詳しく検討するなど、文の構造と機能をさまざまな視点から多角的に研究しようとするものである。

本論文は9章よりなる。

「第1章 主題研究の方法」では、従来の主題研究を整理し本論文で行う主題研究の方法を提示している。本論文の基本方針は、主題研究を構造的なものと機能的なものに分けるという点にある。構造的な主題研究の観点からは、文を有題文と無題文に分け、有題文をさらに顕題文と陰題文に分けた上で、顕題文にどんな種類があり、顕題文の主題になれるのは文の中のどんな成分かという問題を提示し、その解決を試みている。機能的な主題研究の観点からは、主題と非主題の選択がどのように行われるのか、の問題について、それを5つの原理、すなわち、主題を持てるかどうかの原理、主題を持つかどうかの原理、何を主題にするかの原理、主題を明示するかどうかの原理、どうとりたてるかの原理、から説明できるという方針を示しつつ、それらに基づいた分析を進めている。

「第2章 顕題文の構造と機能」では、どんな成分が主題になるかによって、顕題文を次の7種類に分類し、それぞれの文の成立条件を明らかにしている。(1) 格成分主題文、(2) 格成分連体部主題文、(3) 述語連体部主題文、(4) 被修飾名詞主題文、(5) 従属節内成分主題文、(6) 述語主題文、(7) 破格主題文。また、主題として選ばれるのはどんな成分かという機能的な問題についても、単語、文、文章・談話それぞれのレベルにおいて考察している。

「第3章 無題文の構造と機能」では、主題を持たない文の構造を明らかにし、顕題文との使い分けの条件を検討している。無題文の構造については、格関係のレベルの構造がそのまま現れているものとし、無題文の述語は典型的には自動詞や、他動詞の受動形であり、主格名詞は典型的にはそれまでの文脈に現れていない名詞であることを明らかにしている。また、無題文と顕題文の使い分けについても考察し、述語、主格名詞、文の機能、語順、談話の中での機能という5つの観点から使い分けの条件を示している。

「第4章 陰題文の構造と機能」では、述語が主語になっている文の構造を明らかにし、顕題文との使い分けの条件を考察している。陰題文の構造は、主題の「～は」を持たないという点では無題文と同じであるが、陰題文の述語は典型的には、名詞＋「だ」か、動詞＋「のだ」であり、主格名詞は典型的には、「これ」や「私」など、話の現場や前の文脈にある名詞であることを明らかにしている。また、陰題文と顕題文の使い分けについても考察し、名詞文と動詞文では顕題文が使われることが多く、形容詞文では陰題文が使われることが多いことなども指摘している。

「第5章 複文の中の主題」では、複文に現れる従属節を、従属句、強い従属節、弱い従属節、引用節の4つに分類し、従属句と強い従属節の中には従属節独自の主題は現れないことを実証している。そして、その理由として、主題はその本来的な性格から従属度の低い引用節や弱い従属節にはそれ独自のものとして現れるが、従属度の高い、従属句や強い従属節には独自のものとして現れないことを明らかにしている。さらに、従属節と同じような性質を持った文に注目し、そのような従属的な文でも主題が現れないことを考察している。

「第6章 文章・談話の中の主題」では、文章・談話を日常の談話、報道の文章・談話、説明の文章・談話、物語の文章の4つに分け、さらにそれぞれについて冒頭文と非冒頭文を区別して、種類により主題の選択や無題文の現れ方が変わることを解明している。また、話しことば特有の「は」も「が」も使われない場合についても考察し、無助詞の主題性と非主題性、それぞれに対する書きことばの「は」と「が」の対応などを明らかにしている。

「第7章 対比を表す『は』」では、主題を表す働きが弱く、対比的な意味を表す働きが強い「は」について考察している。対比を明示的対比と暗示的な対比に分け、前者については、この「は」が必要になる条件と占める位置について、後者についてはその条件をそれぞれ分析している。さらに、否定文に使われる「は」との関係などについても言及し、この「は」によって対比が表せるのは述語との結びつきが中間的な強さの成分に限られることを論証している。

「第8章 排他を表す『が』」では、主格を表す働きが弱く、排他的な意味の強い「が」を取り上げ、どんなときに排他的な意味が強く出るとのか検討し、2つ以上の候補から選択するときには排他の「が」が使われやすいことや、主格でない成分が排他の「が」でとりたてられることがあることなどを明らかにしている。また、「が」によって排他を表せるのはどんな成分かという問題についても考察を行い、「が」によって排他が表せるのは述語との結びつきが中間的な成分に限られることを解明している。

「第9章 主題の文法理論」では、文法理論の中での主題の位置づけを明確にし、本論文の内容を体系化するために、構造と機能の両面から主題についての文法理論を提示している。構造的な面からは文の階層構造のモデルの中での位置づけを考え、機能的な面からは「は」には主題を表す機能と対比を表す機能があること、「が」には主格を表す機能と排他を表す機能があることなどを指摘している。

「結論」では、本論文のまとめを行うとともに、その他の主題形式の研究の必要性や、文章・談話のレベルでの主題研究の必要性、他の言語などとの対照研究の必要性など、今後の課題を挙げている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語における主題、またそれに関わる「は」及び「が」については、これまで実に多くの研究者によっていろいろな面から分析が加えられてきた。しかしながら、ほとんどの研究がある一視点からある一側面を明らかにする段階にとどまっており、なお体系的な説明を加えるには至っていない。それは日本語文法の根幹に関わるこの問題が、いかに難解なものであるかを如実に物語っている。

本論文は、この問題に対して「～は」で表される日本語の主題を文の構造・機能、両面から体系的に解こうとしている。すなわち、従来の研究をこの二点から徹底的に整理してその成果を取り込みつつ、日本語における主

題の全体像を描くべく新しい枠組を提示している。ここに見られるスケールの大きさと果敢な研究心とは従来の研究にはなかったものである。

構造的な研究では、主題になる成分の種類に着目して文のタイプを分類し、それぞれの成立条件を明らかにしている。その結果、これまでの研究では取り上げられなかったり、位置づけがむずかしかったりした文も体系的な取り扱いが可能であることが証明され、同時に、主題に関わる問題について他言語との対照研究の道が開かれた。この点において今後の研究に寄与する所が大きい。

機能的な研究では、「は」の使用、不使用、すなわち主題と非主題の選択を中心として分析を進め、主題と非主題の選択に関しては条件が5つあることを指摘し、そしてその5つの条件に優先順序をつけることにより選択条件間の相互関係を解明することに成功している。ちなみに、この、主題と非主題の選択条件の解明は日本語教育に貢献する可能性を秘めている。

なお、上記二面からの分析の過程で、複文の中の主題や、文章・談話レベルでの主題の現れ方、主題に関係のある対比の「は」や排他的「が」などについても、従来の研究を踏まえつつ新たな視点から考察を加えている。また、全体を貫き多量の実例に基づいた説得力豊かな議論が展開されている点も特筆される。

以上、本論文は実証性を備えた理論的、総合的な研究であり、その成果は高く評価される。必ずや今後における日本語主題の研究上必見の論文になるものと確信される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。